

シモーヌ・ヴェイユにおける「メタクシュ」のはたらき

—「関係」概念の捉えなおし—

池 田 華 子

1. はじめに

人間関係、因果関係、利害関係などのように、私たちの日常の様々な場面で「関係」という言葉は多用されている。中でもとりわけ、「関係を大切にする」、「関係をつける（関係づける）」、「関係を動かす」といったことが言われる際の「関係」は、主に人間関係を意味するものと考えられ、一般に人間関係が複雑化すると同時に希薄化してもいると言われる現代社会において、しばしば耳にされる表現である。

それらは「関係」ということを主語に、あるひとつの場面を切り取った表現として捉えることができるものである。たとえば、ずっと会う機会がなくて連絡もほとんど途絶えていた昔の友人に、ふと手紙を書きたくなるという場面を考えてみる。それは「関係」を主語に言い換えるなら、自分とその友人との「関係」が動いた場面のひとつとして捉えることができるものである。そして、それを延長し、この「関係」がこれから先どのように動いていくか、どのように表現されていくかに目配りしていくことで、物理的な接触や関わり頻度とは別の次元での「関係」の深まりや展開を知ることができるようになるだろう。

しかし、そのように「関係」を主語に出来事を捉え返していくことは、ときとして「関係」という状況依存的な概念を実体的なものとして捉えることにつながりかねない。その結果、「関係」は操作可能な対象と見なされ、手段化されることにもなってくる。また、その際には「関係」を構成する複数の項における相対的な力関係に応じて、より力をもつほうが「関係」を操作するといった事態が生じることも十分に考えられるだろう。たとえば、学校における教師と児童・生徒の「関係」を例にとるなら、教師が教室の机の配置や授業の仕方、あるいは保護者との関わり方を変えるなど、積極的・能動的な仕方では児童・生徒との「関係」を管理・調整し、操作するなどといったことは、日常的に見られる出来事である。

けれども、そのように操作の対象となった「関係」は、「関係」の一側面にすぎず、「関係」が編まれていくプロセスそのものに含まれるエネルギーをすでに失ってしまっているのではないだろうか。そのような形とは別の仕方では「関係」を主語に語ることもまた可能ではある。

「関係」を実体化するということは、「関係」を構成する項のうちのどれかひとつに自己を重ね合わせて、その一人称からのみ「関係」を捉えるということである。先ほどの教師と児童・生徒との「関係」について言うならば、それを教師から見た児童・生徒との「関係」ということに限定して捉えるような仕方である。また、両者の相互作用に注目し、児童・生徒からの観点を取り入れたとしても、それがあ固定点から見られた「関係」であるということに変わりはない。「関係」のほうからはたらきかけられ、「関係」のありようによって規定される教師および児童・

生徒のありように目をとめて初めて、実体化できない「関係」の側面が浮かび上がってくる。

したがって、「関係」を操作可能な対象にしないためには、一人称を放棄すること、つまり「関係」という中間の場所そのものにとどまることを可能とするようなありようを考えることが必要である。

また、一人称の放棄と関わることだが、「関係」について考えることは等質的・均質的な同質性の空間に、異質なものが入り込むこと——異による同への侵入——を前提としている。言い換えるなら、異なるもの、理解不可能なものをどのようにして抱えていけるかを考えるところに初めて、「関係」的な思考が求められるということである。

それら異質なものの、つまり「私」や「われわれ」とは異なる次元に属するものを〈他者〉と呼ぶなら、「関係」が結ばれるとは、「私」と〈他者〉が互いを含みこんだ「われわれ」になることではなくて、両者があくまで互いに絶対的に異なるものであり続けながら、互いの存在に同意し、互いを承認しあうことである。それは一人称の放棄とも重なってくる。したがって、それは矛盾を矛盾のままに抱える思考のスタイルであって、対処療法的な折衷案とははっきりと異なるものである。

本稿では、以上のような観点から「関係」という概念を捉えなおす意味で、シモーヌ・ヴェイユ (Simone Weil, 1909-1943) のテキストを考察してみたい。

ヴェイユはそのテキストの中で、「～の間に」を意味するギリシア語の前置詞「メタクシュ *μεταξύ*」を名詞として頻繁に用いている。¹ 彼女がギリシア文明や「ギリシア全土が潤されていた神秘的伝統を引き継いだ一人の神秘家」² であると捉えるプラトンに対して、特別の親しみを抱いていたことはよく知られた事実であるが、「メタクシュ」というギリシア語もまた、彼女のギリシアへの愛着の核心を表現した用語として重要なものである。

たとえば、プラトンの対話編『国家』における洞窟の比喻をめぐる、彼女は次のように述べている。

「闇から太陽の観照へと移行するには、仲介物つまり『メタクシュ』が必要である。選択される仲介物によってそれぞれ異なる道程が区別される。」³

ここに見られるように、「メタクシュ」はしばしば「仲介 *intermédiaire* / *médiation*」とも呼びかえられている。つまり、「メタクシュ」とは仲介するものであり、洞窟内に象徴される闇の世界と太陽に象徴される善の世界とが、その圧倒的な次元の違いからくる非連続性を保ったままに、それを介してつながれるようなものである。「仲介」となるものなしに、相矛盾する2つの世界を結びつけようとすれば、無理な力を加えたり、どちらか一方を意図的に無視したりといったことにつながりかねない。つまり洞窟の世界から見ていなくても、太陽の世界から見ていなくても不十分なのである。

また、私たちはあまりにも性急に「太陽」に到達しないように警戒しなければならない。⁴ なぜなら、洞窟の外へと向かう道は太陽の下へと連続的につながっているのではなく、2つの世界には絶対的な断絶があるからである。この断絶ゆえに、外へと向かう道のりは苦痛に満ちたものとなり、理不尽な強制を伴うものである。さらには、一旦その眼で「太陽」を見た者たちの洞窟内への帰還にもまた、同様の苦痛が伴う。

「メタクシュ」とはこの断絶を、つまり両者の間に広がる「無限の距離」⁵ を承認しつつ、そ

れを越え出ていくことをも可能にするものである。すなわち「メタクシュ」はそれ自身のうちに、隔たりと統合という矛盾した2つのありようを同時に成立させるはたらきを内包している。

また、「メタクシュ」が名詞として用いられることは、一人称の視座から構成された遠近法的世界を前提として、「私／われわれ」と何かとの間について考えるのではなく、「メタクシュ」という媒介を前提として「私／われわれ」というものが捉えなおされることを意味している。換言すれば、先に述べた「関係」を主語に語るというありようが、ヴェイユのテキストにおいては「メタクシュ」のうちに見出されるということである。

以上のようなことを踏まえた上で、本稿ではヴェイユのテキストをもとに、まず「関係」における対象化不可能な側面が見失われた状態について考察し、次に、それに対して「関係」を主語に立てること、つまり名詞的に用いられる「メタクシュ」のありようについて考察する。そして、それらの作業を通じて、「関係」概念の捉えなおしを図るとともに、「関係」の側から見るという方法をとることで見出される「関係」概念の可能性について明らかにしていきたい。

2. 「関係」の忘却

「私とはすなわち世界の中心である。この中心的な位置は遠近法によって空間のなかに描かれる。ほかの人たちとはすなわち宇宙の諸小部分であり、私により近いかな否かによってより重要であるかな否かが定まり、実際には大部分は無である」⁶

このように描かれた「私je」を中心とする遠近法的空間は、個人が一般的に抱いている世界観だとヴェイユは言う。「ほかの人たち」は「私」に「より近いかな否かによってより重要であるかな否か」が定まるとあるように、遠近法の下で「私」と「ほかの人たち」との「関係」を規定するのは「私」を起点として測られた「ほかの人たち」に対する距離である。距離の近さは親密さを、遠さは疎遠さを表す。

しかし、彼女はこのような認識のありようを「遠近法によるさまざまな錯覚」⁷のひとつと捉える。つまり、「私」と「ほかの人たち」との「関係」と見なされている距離そのものが「錯覚」なのである。別の言い方をすれば、そもそもそれをひとつの距離と見なすこと、すなわちそれをひとつの「関係」と見立てる見立て方そのものが「錯覚」なのである。

この「錯覚」は「関係」に対する誤解であるより以前に、「関係」そのものの忘却である。この世界には「無限の距離」を隔てた彼方のものについての思考が入り込む余地がない。「ほかの人たち」はあくまでも相対的な意味での距離の遠さのうちにあるのであって、「私」の手元に置かれている存在——「私」にとって操作的なはたらきかけが可能な対象——に止まっている。つまり、ここには「ほかの人たち」はいても「私」とは絶対的に異なる何か、「私」に対して諾とも否とも言わない何かが入り込む余地はないのである。「私」と「ほかの人たち」とはたとえ両者が友好的な「関係」にあるにせよ、敵対的な「関係」にあるにせよ、少なくとも「私」というひとつの視点から構成された世界に存在しているという意味において、同じ地平を共有していると言うことができるだろう。

それに対して、ヴェイユは次のように言う。

「相反するものとは、私と他人であり、双方の距離はきわめて遠い」⁸

ヴェイユのテキストにおいて、「相反するもの」とは一と多、あるいは1と2である。すなわち、「相反するもの」が提示されるときとは、あるひとつの視点から構成された世界のうちに、その視点とは根本的に相容れないものが現出するときなのである。そこにおいて初めて、一なるものに対しての複数性、多元性が生じる。

したがって、ここでの「他人」は「私」を中心とした遠近法的世界における「ほかの人たち」とは異なるものとして捉えることが可能なものである。それは「私」の世界に収まりきらないもの、「私」とは根本的に相容れないもの、すなわち「私」という単一的な視点から捉えられた世界に変容を迫るものなのである。また、その意味では、双方の距離の遠さは相対的な遠近を越えて、時間と空間の全体からなる「無限の距離」、無限の隔たりを指すものと考えられる。⁹

そして「私」とそれ以外の存在を隔てるこの「無限の距離」は、「私」にとって操作可能な存在、対象化可能な存在はありえないということを示すものとなる。つまり、「私」を基準として測られているかに見えた距離は、ここに至って反対に「私」を規定し、「私」に対してはたらしかけられるものとなるのである。

そのとき、「世界のなかにある何ものも世界の中心ではなく、世界の中心は世界の外」¹⁰ にあり、「此岸の何ものも私という権利をもっていないということ」を、認めなければならない¹¹ というヴェイユの言葉は、単に「私」を中心とした利己的なあり方に対する批判ということ以上の意味をもつようになる。

それは距離に対する配慮と尊重の姿勢を示すものである。「視点なるものは不正の根源」¹² であって、「特定の視点を撤廃することは、思考に不可欠の浄化である」¹³ との件もまた同じことを表している。

こうした彼女の語りが含意しているのは、単に主観的な視点を排除して、状況を俯瞰的に観察する客観的な視点を獲得することではない。むしろそれは「私」が見るということに含まれる主観性を徹底させること、つまりその洗練によって、「私」のありようそのものを変容させることである。それは距離の捉えなおしを通して、「錯覚」を脱し、正しい認識にいたることを意味している。

しかしながら、たとえ「単数の第一人格」¹⁴、すなわち「世界の中心」としての「私」を放棄したとしても、それに代わるものとして「複数の第一人格」¹⁵、すなわち「われわれ」を「私」と同じ位置に置くのでは、さらに「錯覚」を深めることにつながるだけである。というのも、「私」を中心とした遠近法的世界においては、「錯覚」の中でも「私」と「ほかの人たち」との間に距離があることが認識されていたが、「われわれ」を中心に置くとき、「関係の諸項はもはや、私と他人でも、私と他人たちでもなく、われわれという均質な諸断片に」¹⁶ すぎなくなるからである。

ヴェイユはそのテキストの中で、「われわれ」を始めとする集団的なものに対する嫌悪および警戒心を繰り返し表明している。そこには距離がないのである。「それらはそれら自身だけで、仲介なくして結びつけられている。」¹⁷

一見すると、集団というものは複雑に編み合わされた「関係」のありようを具体的に体现するもののように思われるが、そこには相対的な意味においてすら「私」と異なるものは存在しない。つまり、「われわれ」を構成しているのは生物学的な意味においては一人一人異なる存在だ

が、それは結局のところ、置換可能な「私」（役割としての人）の集まりだということである。

したがって、「私」を主語にする世界よりも「われわれ」を主語にする世界のほうが、より平板で一面的である。世界の複数性、多元性は、数としての多さに基づくものではないのである。さらにその意味では、「われわれ」とは責任を担いえないあり方であるということもできよう。集団に対する責任という考え方が、つねに全体主義的なものに陥る危険性を孕んでいることもまた、それを裏付けている。

以上のことからすれば、本項で考察してきた「関係」の忘却には2つの側面があると考えられる。すなわち、ひとつは「関係」が、ある固定的な視点を前提とした相対的な距離の遠近としてしか認識されていないこと、そしてもうひとつは「関係」という思考そのものが意味をなさない状況にあることである。

こうした状況を踏まえた上で、「関係」から離脱し俯瞰的な立場に立とうとすること、また逆に、距離を持たずに近さの中で親密にあろうとすること——ヴェイユはこの両方のあり方をともに、あまりに性急に「関係」を超克しすぎると見る。

すなわち「関係」の忘却は、「関係」を持ち堪える力のなさを意味しているのである。ヴェイユが述べる、そしてまた本稿で明らかにしようとする「関係」とは、「私」を今・ここという位置から一旦丸ごと引き剥がすものすべてを言う。そして、意識的にせよ、無意識的にせよ、それら引き剥がすものすべてを可能な限り回避しようとする意志および努力が、「関係」の忘却を招いているのである。それは彼女の言を借りれば、「友愛」に反し、「隣人愛」と同義とされる「正しさ／正義」からも遠いありようである。

諸々の「関係」を、同じ地平に立って言葉を交わし合うことのできる「関係」、あるいは互いを理解し、意志的に関わることのできる「関係」から、「不均斉であり非可逆的な関係」¹⁸として捉えなおすこと。それを通して初めて、「私」とは可換性が成立しえない<他者>というもののありようが了解される。

次節では、こうした可換性および対称性が成立しえない此岸と彼岸の「半ば」を意味する「メタクシュ」という概念を手がかりに、本稿で明らかにしようとする「関係」概念について述べていく。

3. 「半ばに位置すること」——「メタクシュ *μεταξύ*」について

前節では、通常の認識においては「関係」が二重の意味で忘却されていることについて述べてきた。その際にはたとえば「ふたりの人間がひとつになり、しかも、ふたりを分けへだてる距離を細心に尊重するということは不可能である。」¹⁹

それに対して、ヴェイユが考えている「関係rapport」は、彼女が数学的な概念を援用して「非アーベル」的關係と呼ぶものに象徴されている。²⁰ それは任意の2つの元 a, b に対して $ab=ba$ が成立しえない群のことを言う。つまり、 a と b との間には可換性が成立せず、両者の位置は交換不可能なのである。

一般に、このような「関係」について考えることが非常に困難を伴うことは疑いえないだろう。というのも、通常の認識——彼女の表現を用いるなら「自然的naturel」認識——においては、それについて具体的且つ経験的に知ることが不可能だからである。いわば a と b の間には、はか

り知れない「無限の距離」がある。

けれども、ヴェイユは以下のように述べている。

「知性による道程において、思考を喚起するものとは矛盾を提示するものである。換言すれば、それは関係である。外見上の矛盾があるところにはどこでも、対蹠的なものの相関、つまり関係がある」²¹

すなわち、この矛盾は思考を喚起し、知性にはたらきかける「関係」となる。「関係」は「対蹠的なもの」、「相反するもの」を指し示し、知性を通常の認識の次元から引き剥がす。つまり「関係」とはまずもって此岸と彼岸の間に広がる絶対的な断絶の提示なのである。

したがって、この場合に「関係」があるということは、関わり合っている、つながっているということよりもむしろ絶対的な断絶があるということを示すものとなる。ただしそれは、散乱したパズルのピースを集めて一枚の絵を完成させるときのような、分節化されたものの統合を前提とするものではない。

ヴェイユはプラトンの洞窟の比喻で描かれる洞窟の中と太陽の下との相違を、存在と絶対善との二律背反として捉える。²² それは存在 (existence) と実在 (réalité) の相違に対応する。またこの相違は相対的なものではなく、両者は初めから厳密に峻別されている。つまり、両者が同一の地平に統合されること、あるいはどちらかがどちらかに回収されることはありえない。したがって、ひとつの平面上に完成されるパズルの比喻はこの場合、不適當なのである。

けれども、ここにおいてこうした断絶に釘付けにされていることは、人を疲弊させ、絶望や諦めの淵に追いやるだけではない。むしろ、そこにおいて初めて「願望」が、到来する応答を待ちのぞむことが、可能になるからである。その「願望」は、それが叶えられるか否かを問わず、まるで何かにつかれたように、繰り返し、絶えることなく延々と持続する。それはいわば子どもの願いのようなものである。

「子どもは、ひょっとするとパンはないかもしれないと暗に言われたとしても、叫ぶことをやめない。とにかく、叫ぶのである。危険なのは、パンがあるのかないのかと、たましいが疑うことではなく、自分は飢えていないという嘘で安心してしまうことである。嘘によってしか、たましいはそういう安心を得られない。」²³

こうした叫び（すなわち「願望」）はときに親を疲れさせるが、結果として子どもの願いの純粹さに押されて、親はあるはずのないパンをどこかからひねり出してくるのである。それは単に親が子どものわがままを聞き入れて甘やかしているということではなく、子どもの願いに今ここで応えようとする親の愛を示す出来事として捉えることができるものである。

したがって、子どもの叫びが提示する、親にとってのある種の限界状況とは、親が子どもとの「関係」からのはたらきかけを受けていることを意味するものである。もちろん物理的な意味では、親が子どもから直接にはたらきかけられているのだが、そのときなぜ親がそれをわがままとして片付けず、子どもの願いに応えていこうとするかといえば、親の中にこの「関係」を支えてつなごうとする願いがあるからである。その意味で、親がどこかからひねり出してくるパンとは、いわゆる食べ物としてのパンには限らず、この「関係」を保ち育む上での糧となるようなもののメタファーであることは明らかであろう。

このことは、先に述べた「非アーベル的關係」($ab \neq ba$) をいかに誠実に持ち堪えるかという

ことに重なってくる。したがって、この「関係」に答えを求めようとするのもまた、観念上の遊戯とははっきりと異なるものである。ここには「私」が自ら進んで解決困難な問題を持ち出し、それについて思索を深めることを通じて知性の訓練をするというような構図は見出しえない。それは不可能性に先立たれた無限の可能性に触れることであり、その不可能性ゆえに実在的なものである。

このことは、ヴェイユの「神」についての捉え方に象徴的に示される。彼女は何かをなしうる「神」、つまり全知全能の「神」よりも、むしろ無力な（それゆえに「善」なる）「神」を愛した。そのことは数々の奇跡を起こしたキリストよりも、十字架上で罪人として死なれたキリストを愛したこととも重なる。この点をもって彼女の思想に救いようのない悲観主義やある種のマゾヒズム（苦痛信奉）を見出す論者もいるが、それはこれまで述べてきた「願望」の純粹さゆえの強靱さに眼を向けていないからであろう。

「人はだれしも、人生のうちに何度か、この世には善はないとはっきり認めねばならなかった時を、おそらく経験しているはずである。ところが、人は、この真実が見えてくると、それを嘘でおおいかしてしまうのである。それどころか、悲しみの中に病的な快樂を求めつつ、この真実をそのとおりに告白するのをよこんでいるかに見える連中がたくさんいる始末である。かれらは、この真実を真正面から見つめるのは、一秒間以上は到底堪えられなかったのである。」²⁴

「善」の不在を公言してはばからない、ある種の開き直りとの決定的な相違は、彼女がその不在こそ却ってそのものの実在性を証明するものとなるという逆説的な論理を打ち立てていくところにある。つまり、それが不可能性に先立たれた無限の可能性ということである。

そしてこの可能性に関わる一種の能力としての「願望」は、その過剰さにおいて不可能を可能にする。それは不在の「神」が疲弊し、ついには見るに見かねて此岸へと降ってこられるように祈り尽くすことであり、先のパンを求める子どもの叫びである。

したがって、別の角度から言えば、この「願望」ゆえに、「相反するもの」に象徴される限界状況は、断絶あるいは虚無ではなく、「関係」と呼ばれるのである。つまり、この断絶は此岸と彼岸とを絶対的に到達不可能な隔たりの両端に置くものではなく、2本の平行線が無限の彼方で交差する可能性をもつように、どこかの地点で必ず等号で結ばれうるものなのである。

その等号は、無限の隔たりに架けられた「橋pont」である。たとえばヴェイユはこの「橋」を古代ギリシア文明のありように見出す。古代ギリシアは「無限の距離についての啓示」²⁵をもっていたと彼女は捉えるのである。

「そうした距離にとりつかれたギリシアは、そこにいくつもの橋をかけることだけに心をくばった。ギリシア文明のことごとくはそれらの橋からなり立っている。」²⁶

つまり彼女に従えば、ギリシアには「関係」における絶対的な断絶についての認識が浸透していたのである。そして、その「無限の距離」に架ける「橋」、それは「関係」のありようそのものである。過剰なまでに純粹な「願望」——ヴェイユの表現に拠るならば「愛の狂気folie d'amour」——に支えられて、不可能な隔たりに「橋」がかかるのである。

また、「橋」というメタファーが担う意味は、此岸から彼岸へと行き着くことが可能になるということだけではない。改めて言うまでもないことであるが、「橋」は人が住まうための場所であ

はなく、そこを通過するための場所である。「橋」そのものを目標とすることはナンセンスであり、それはつねにどこかへ到るための通り道であって、最終的な目的地は別にある。

換言すれば、どこかの土地に根づき、そこに住まうことよりも、つねにどこかへの道中であるような放浪の身にあること——「橋」のメタファーで示されるのはそうしたありようである。その「橋」の行き先がどこであるか、そして「橋」を渡りきった先の「対岸で誰を見出すことになるのかをわれわれは知らない」。²⁷

そのようにして森羅万象に「メタクシュ／仲介」を見出していくことは、つねに「半ばに位置すること」、「半ば」に身を置くことである。

「仲介物の役割は、一方で、無知と十全な叡智との半ばに、時間に服する生成と存在の充溢の半ばに位置することである。」²⁸

「仲介物」、すなわち「メタクシュ」とは、「半ばentre」の場所を指し示すものであり、またその「半ば」自体を作り出すものでもあり、さらにあえて「半ば」の場所に止まることそのものでもある。そして、この「半ば」とはすなわち「橋」のことであり、これまで述べてきた「関係」のことなのである。

ヴェイユは他にも「美しいものの観照、知性の鍛錬、慰めのない苦痛、不死の信仰なしの死など」²⁹を「メタクシュ」の例として挙げている。それらはすべて $ab \neq ba$ を意味するものである。それらに対峙することによって私たちがある種の不可能性を体験することは事実だが、それと同時に、その不可能性が $ab \neq ba$ という式として形を成し、ひとつの数式として現実に表現されていることもまた事実である。つまり、それは隔たりと同一性を同時に成立させるものであるがゆえに、「関係」と呼ばれるのである。同様の意味において、それを不可能であると同時に可能であるようなもの——絶対的な矛盾の中に見出された調和と均衡——を指し示すものと言い換えることも可能だろう。

この調和と均衡を見出す（つまり、「半ば」に位置する）ためには、それをイメージとして再構成する必要がある。このイメージについては次節で論じるが、言わばそれは「関係」を主語に置きながら、それを実体化せずに抱えていくということである。

「橋」のメタファーで言うなら、この場合「関係」を実体化することは、「橋」に住まうことを意味する。それが奇妙にねじれたありようだということは言うまでもないだろう。少なくともここにおいて私たちは、できあがった「橋」を眺めやるのではなく、「橋」を架けてそれを渡る、その只中に止まろうとするのである。

けれども、「橋」を渡りきった先の目的地に到達することを目指すのではなく、つねに道中にあることが、本稿で明らかにしたい「関係」のありようだとするとき、一見するとそれはまさに先に否定的に述べた「橋」の上に住まうことそのもののように思われるかもしれない。

ここにおいて「橋」とは何かということを改めて考える必要がある。重要なのは「橋」とは実体的な「半ば」の位置、中間の位置を意味するものではなく、仲介する機能それ自体を意味しているということである。したがって、「橋」を渡るという動作の只中に止まることは、仲介する機能のはたらきに与ることである。そして、その機能とは $ab \neq ba$ をイメージするはたらきであり、仲介するものを介することで「相反するもの」を相対的な近さというより以上のつながり（つまり、調和と均衡）の次元にもたらすことである。

次節では、「関係」をイメージとして再構成するありようについて考察するとともに、本稿を通して論じてきた「関係」のはたらきとその可能性について明らかにしたい。

4. 待たれつつ待つこと——「関係」概念の捉えなおしとして

前節では、「関係」を構成する各々の項に対して直接に応答することよりもむしろ、「関係」そのものからのはたらきかけを受け、それに照らして、限界状況に調和と均衡をもたらす「願望」のはたらきについて述べてきた。そのありようについて、ヴェイユは以下のように述べている。

「調和や比例は相反するものの相反するがままでの統一である。相反するものを接近させるために力を加えるところに、また相反するものを混淆させるところには、調和はない。」³⁰

ここでの「比例」は数学的意味における「調和」の実現を意味するが、このように語られる「調和」や「統一」が、何らかの全体性、究極性を前提としたものではないことはこれまでの議論からして明らかである。それは「相反するもの」に突き当たった際の行き場のなさ、落ち着いたなさ、困惑、絶望が、その元の感触を保ったまま「同意」可能なものになっていく、そのプロセスそのものを指す言葉である。

また、究極性の欠如は、合目的性の欠如を意味している。「物事にはみな、原因があるが、目的がない」³¹のである。「関係」を主語に置くこと、また「橋」への注目、それが意味する「半ばに位置する」という役割——これらはすべて、合目的性が欠如した世界において、いかにそこに住まうことができるかということへのひとつの応えである。

その意味で本稿における「関係」は、「関係」を大切にするというような言い回しや、「関係」とは何かといった問いの立て方の範疇を外れたところで考えられているとすることができる。言うなればそれは「関係」について考えることなく、「関係」の側から見ることなのである。換言すれば、それは「関係」をイメージとして再構成することである。誰かと誰かの関わり合いという実体的な次元を越えて、森羅万象を「関係」そのものを主題として動いていく出来事としてイメージしなおすこと。そのイメージを熟視することで、彼岸から此岸に「實在性réalité」がもたらされる。

ヴェイユによれば、このイメージを熟視するという方法は、「ある意味で世界の美しさと触れ合うこと」だと言う。これまで「関係」が意味する隔たりと同一性、不可能性と可能性を同時に内包するありようについて、主に限界状況という表現で捉えてきたが、それは何も壮絶な闘病の病床や、殺人の繰り返される悲惨な戦場などといったように、明らかに非日常的なものとして捉えられる場面のみを限定的に指すものではない。限界状況はごく普通の外見を伴って、私たちの日常世界に不意に分け入ってくる。その不可避性と確信に満ちた精確さ (la certitude) に関わって、彼女はそれこそが「世界の美しさ」であると逆説的に表現するのである。

したがって、「関係」をイメージとして再構成し、熟視するという方法は、現実から距離をとり、出来事を俯瞰的な立場から観照するような態度を意味しない。たとえばそれは歴史を滅ぼされた文化・文明の側から見ることである。ヴェイユが「過去を包んでいる歴史の外被を愛してはならない。語らない、名もない、消え失せた過去の部分を愛さなければならない」³²と述べるとき、それは単に強者の歴史を弱者の歴史に置き換えようとする試みなのではない。彼女がそのように言うのは、歴史において「関係」を主題にするとき——つまりそこに見出される「無限の隔

たり」に架けられた「橋」のありように注目するとき——現存する古典のテキストには明らかに意図的に排除あるいは無視された語句や事実があることに気がつくからなのである。彼女はその気づきに沿い、意味が釈然としない語句や語群に対してはいくつもの試訳や独自の注釈を施し、折に触れて繰り返し訳出と再検討を重ねるという仕方³⁴で歴史を再構成していく。その「テキスト中心主義」は、「どの学者が、どの時期に、どのような方針で上梓した校訂版^{エディション}を選択するかという古典研究の常識」³⁵よりもテキストそのものに向かい合うことを大切にするというほどに徹底したものであった。

改めて言うなら、イメージすることは想像の中での抽象的な作業ではない。それは見ることをもって現実に参加すること——「無限の隔たり」を超克するのではなく、その隔たりに加えられることによって、「関係」の中に留め置かれることなのである。

私たちが応えようのない「なぜpourquoi」³⁶に直面するときにはいつでも、そこに仲介するものとしての「関係」の機能がはたっている。つまり、ある種の限界状況が提示されている。私たちはそのはたらきを受けて「なぜ」という問いを簡単に放棄することができなくなる。

また、「なぜpourquoi」は正確には「何のために」を意味する問いかけ、すなわち原因ではなく目的を問う問いである。原因を答えることは容易でも、目的については答えられないという事態は日常のいたるところで見受けられる。たとえば先に挙げたパンを求める子どもの叫びもまた、そうした「なぜ」のひとつとして捉えることが可能だが、それに対して「パンを買うお金がないから」と答えたところで子どもの思いは鎮まりはしないだろう。とりわけ目的の欠如、究極性の欠如をこの世界の本質的なありようとして捉えるヴェイユにとって、「なぜ」という問いかけがもつ切実さは特別なものである。

それに対して、ある種の決定論（運命論）に従うことによって——つまり、運命やそれが示す物事の成り行きにおける必然性を受け入れることによって——その問いかけを乗り越えることも可能かもしれない。しかし、彼女は「必然性nécessité」という同じ語を用いながら、その場所を「関係」がもつ可能性に託して語っていく。

「必然性は選択の不在であり、無関心である」³⁷と彼女が述べる時、それはすでに決定され、私たちの力ではどうしようもない運命の力を意味するよりもむしろ「無関心」というありようの捉えなおしを意味している。それは「正しい者たちも犯罪者たちも平等に太陽と雨の恵みを受ける。正しい者たちも犯罪者たちも平等に日照りに打ちのめされ、洪水に溺れる」³⁸と描写される場面に表れているような「無関心さ」である。

「なぜ」の問いかけに答えがないのは合目的性の欠如ゆえであると同時に、この「無関心」に倣うことによって私たちが「必然性」の中に加えられたからでもある。その意味で「必然性」は動かしがたい運命であるよりもむしろ、「私」による恣意的な選択や判断の自由の理不尽さを告発するものなのであり、それに従うことは、運命を前にした人間の無力さを意味するよりもむしろ、通常の認識においては不可能と感ぜられるものに対してただ「同意」とするというありよう、つまり「関係」を表象する唯一の方法を意味しているのである。

本稿を通して考察してきた「関係」は、「関係」を構成する複数の項におけるある項から別の項へのはたらきかけを意味するのでも、ひとつの項を中心とした現実世界のありようを意味するのでもなく、そうした項の背景にある距離の体験としての隔たりの看取とその距離への敬意を意

味していた。それはつまり、先の「無関心さ」への「同意」であり、前の2つの「関係」概念を「存在」の論理とした際の、「非 - 在」の論理である。

換言すれば、「関係」の側から見ることで、「関係」をイメージとして再構成することは、この「非 - 在」の論理をひとつの方法として実現したものである。それはいわゆる行間を読むという言い方に見られるような、出来事の奥に隠された意味や意図を読み取る手法を意味するものではなく、ヴェイユの貫く「テキスト中心主義」に示されているような、出来事を追体験する方法を言うものである。そしてその体験は先の「同意」を含むがゆえに、ある種の普遍性に触れるものとなる。

また、ここにおいて「同意」を与えるのは「私」の意志によってではないことは明らかである。「私」の側における何らかの構えや判断を待たずに「同意」はなされる。つまり「私」の側からの「願望」および「同意」に先立って、すでに「私」を待つものがあるのである。

この待たれつつ待つというありよう——それは本稿で述べてきた「関係」の側から見るという方法の背景をなす論理である。そして本稿の主題であるヴェイユにおける「メタクシュ」とはまさにこの論理を体現するものなのである。換言すれば、「メタクシュ」とは待つことと待たれることをひとつに包んで提示する概念であり、その意味で仲介するはたらきと定義されるのである。

そのはたらきを受けて、「私」は此岸において微小な一点にまで縮められると同時に、彼岸へとつながる無限の可能性に開かれることになる。つまり冒頭に挙げた教師と児童・生徒との「関係」を改めて例にとるなら、両者の「関係」を動かしていくのは、教師による教育的なはたらきかけでも、それに対する児童・生徒の応答でもなく、この待たれているという予感が形成する教育空間そのものであると考えられるのである。そしてその空間は根本的な迎え入れの態度に貫かれている。

これらは決して空虚な想像や理想ではない。たとえばそれは放浪の民がどこかにある故郷を思うときのように、いつもどこかで待たれていることを感じながら、道中にあるようなものである。その予感に支えられて、旅人は此岸における今と彼岸における今をメタフォリカルな語法を以て同時に生きる。彼が彼岸を賛美するあまり此岸を疎かにするようなことは決してない。言うなれば、待たれていること、その予感こそ此岸の旅人、すなわち「私」に「なぜ」と叫ばせるものであり、同時に「関係」を持ち堪える上での希望ともなるものなのである。

* 訳語を統一する目的から、引用した邦訳については一部変更を加えている。

¹ Weil, S. 1953. *La source grecque*, p.106 = 「プラトンにおける神」『ギリシアの泉』1992年.157頁

² Weil, S. 1953. *La source grecque*, p.77 = 「プラトンにおける神」『ギリシアの泉』1992年.113頁

³ Weil, S. 1953. *La source grecque*, p.106 = 「プラトンにおける神」『ギリシアの泉』1992年.156頁

⁴ 「プラトンにおいて、仲介という考えは本質的な役割を演じる。『フィレボス』で述べられているように、「一者」にあまりにも性急に到達しないよう警戒しなければならないのである」(Weil, S. 1953. *La source grecque*, p.128 = 「プラトンにおける神」『ギリシアの泉』1992年.189頁)

⁵ Weil, S. 1966. *Attente de Dieu*, p.109 = 「神への愛と不幸」『神を待ちのぞむ』1987年.113-114頁

⁶ Weil, S. 1966. *Intuitions pré-chrétiennes*, p.135 = 「神の降臨」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.376頁

⁷ Weil, S. 1966. *Intuitions pré-chrétiennes*, p.137 = 「神の降臨」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.378頁

- ⁸ Weil, S. 1966. *Intuitions pré-chrétiennes*, p.139 = 「神の降臨」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.379頁
- ⁹ 「無限の距離は、時間・空間の全体からなっている」(Weil, S. 1966. *Intuitions pre-chretiennes*, p.166 = 「神の降臨」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.403頁)
- ¹⁰ Weil, S. 1966. *Intuitions pré-chrétiennes*, p.137 = 「神の降臨」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.378頁
- ¹¹ 同上
- ¹² Weil, S. 1964. *La connaissance surnaturelle*, p.234 = 『カイエ 4』1992年.420頁
- ¹³ 同上 = 『カイエ 4』1992年.421頁
- ¹⁴ Weil, S. 1966. *Intuitions pré-chrétiennes*, p.140 = 「神の降臨」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.380頁
- ¹⁵ 同上
- ¹⁶ 同上
- ¹⁷ 同上
- ¹⁸ Weil, S. 1964. *La connaissance surnaturelle*, p.149 = 『カイエ 4』1992年.266頁
- ¹⁹ Weil, S. 1966. *Attente de Dieu*, p.207 = 「神への暗黙的な愛の種々層」『神を待ちのぞむ』1987年.222頁
- ²⁰ Weil, S. 1964. *La connaissance surnaturelle*, p.149 = 『カイエ 4』1992年.266頁
- ²¹ Weil, S. 1953. *La source grecque*, p.106 = 「プラトンにおける神」『ギリシアの泉』1992年.156-157頁
- ²² 富原眞弓 1986 「シモーヌ・ヴェーユにおけるプラトンの二元論あるいは善の超越」『上智大学仏語仏文学論集』132頁
- ²³ Weil, S. 1966. *Attente de Dieu*, p.209 = 「神への暗黙的な愛の種々相」『神を待ちのぞむ』1987年.225頁
- ²⁴ 同書p.209-210 = 「神への暗黙的な愛の種々相」『神を待ちのぞむ』1987年.225頁
- ²⁵ Weil, S. 1960 *Écrits historiques et politiques*, p.77 = 「オク語文明の靈感は何にあるか？」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.222頁
- ²⁶ 同上
- ²⁷ 同上
- ²⁸ Weil, S. 1953. *La source grecque*, p.106 = 「プラトンにおける神」『ギリシアの泉』1992年.156頁
- ²⁹ シモーヌ・ヴェイユ『カイエ 4』1992年.301頁 この箇所は公刊テキストから脱落しているため原文頁なし。
- ³⁰ Weil, S. 1960 *Écrits historiques et politiques*, p.81 = 「オク語文明の靈感は何にあるか？」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.229頁
- ³¹ Weil, S. 1966. *Attente de Dieu*, p.169 = 「神への暗黙的な愛の種々相」『神を待ちのぞむ』1987年.181頁
- ³² Weil, S. 1966. *Attente de Dieu*, p.161 = 「神への暗黙的な愛の種々相」『神を待ちのぞむ』1987年.172頁
- ³³ Weil, S. 1963. *L'enracinement; prélude a une déclaration des devoirs envers l'être humain*, p.198 = 『根をもつこと』1998年.254頁
- ³⁴ 富原眞弓『シモーヌ・ヴェイユ 力の寓話』2000年.89頁
- ³⁵ 同上
- ³⁶ この「なぜpourquoi」という問いかけは、ヴェイユが十字架上のキリストによる「わが神、わが神、何ぞわれを見捨て給いし」という叫びから連想し、「不幸」に引き裂かれた魂の叫びとして繰り返し引用するものである。
- ³⁷ Weil, S. 1966. *Intuitions pré-chrétiennes*, p.156 = 「神の降臨」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.394頁

³⁸ Weil, S. 1966. *Intuitions pré-chrétiennes*, p.150 = 「神の降臨」『シモーヌ・ヴェーユ著作集2』1998年.389頁

【引用・参考文献一覧】

- Weil, S. 1949 *L'enracinement : prélude à une déclaration des devoirs envers l'être humain*, Paris:Gallimard.
=1998 (1967) 山崎庸一郎訳. 『根をもつこと』春秋社
- 1950 *La connaissance surnaturelle*, Paris:Gallimard.
=1992 富原眞弓訳. 『カイエ4』みすず書房
- 1951 *Intuitions pré-chrétiennes*, La Colombe.
=1998 (1968) 橋本一明・渡辺一民編. 『シモーヌ・ヴェーユ著作集2 ある文明の苦悶 後期評論集』春秋社
- 1953 *La source grecque*, Paris:Gallimard.
=1992 (1988) 富原眞弓訳. 『ギリシアの泉』みすず書房
- 1966 *Attente de Dieu*, Paris:Fayard.
=1987 (1969) 田辺保・杉山毅訳. 『神を待ちのぞむ』勁草書房
- 川口光治 1990 「シモーヌ・ヴェーユにおける「表象représentation」の問題」『フランス語フランス文学研究』通号57
- 1997 「《メタクシュμεταξύ》——伝統と進歩の概念を超えるもの——」神戸学院大学人文学会『年報・文化』第8号
- 小林 恭 2006 「創造・脱創造・一円相——シモーヌ・ヴェーユからの呼びかけ」『京都哲学撰書 別巻 禅と京都哲学』燈明舎
- 富原眞弓 1986 「シモーヌ・ヴェーユの「脱・創造神話」の出発点としての「洞窟神話」再解釈」『上智大学仏語仏文学論集』21巻
- 1986 「シモーヌ・ヴェーユにおけるプラトンの二元論あるいは善の超越」『上智大学仏語仏文学論集』20巻
- 2000 『シモーヌ・ヴェーユ 力の寓話』青土社

(臨床教育学講座 博士後期課程1回生)

(受稿2007年9月7日、受理2007年12月12日)

The Function of $\mu\epsilon\tau\alpha\xi\upsilon$ in Simone Weil: Reconsidering the Concept of Relation

IKEDA Hanako

Presently, we often think that various problems in educational environment, such as bullying and truancy, result from the dilution of human relations in our daily lives. In such contexts, we tend to think that the concept of relation is something substantial—something we can actively and manipulatively deal with. However, in order to grasp the invisible aspect of the relation, we should take a different approach. This article casts new light on the concept of relation by reexamining Weil's idea about $\mu\epsilon\tau\alpha\xi\upsilon$. By using the Greek preposition $\mu\epsilon\tau\alpha\xi\upsilon$ as a noun, she shows us the importance of "medium" or "mediation" in our encounters with the other whom we may not recognize easily. Such encounters put us into the state of confusion and conflict. It is the function of $\mu\epsilon\tau\alpha\xi\upsilon$ that gives us energy to tolerate it. In the following, first, our daily lives will be discussed as the state of oblivion of relation. Next, examining her usage of $\mu\epsilon\tau\alpha\xi\upsilon$, another possibility entailed by the concept of relation will be revealed.